

# 私が体験した

## 『保母』という仕事

——その一——

大人とのかかわりから

四宮 美帆

私はこの春、二年間勤務した保育園を退職した。直接の理由は、六月に出産を迎えるということだったが、産休をとることを選ばなかったのは、保育園での自分の保育に限界を感じ、もう一度ゆっくり落ち着いて保育について考えたからである。

私は大学を卒業してすぐ、神奈川県内の公立保育園に就職した。保育園という場を選んだのは、自分が大学時代に考えたこと（『子育て支援』に興味を持ち、実際に支援が支援として機能するには、その提供の仕方に配慮することが必要であるという自分なりの結論



に達していた)を、とにかく実践してみたいという気持ちからだ。保育園実習の経験がなく保育園というものをほとんど知らずにいた私は、就職して目の当たりにする現実には驚くこと、戸惑うことの連続だったが、そこで何とか自分なりの保育、自分なりの子育て支援を実践してみようと必死になった。今、仕事を離れてみて、この二年間に感じ、考えたことを記録をもとに振り返ってみようと思う。

保育園で日々過ごしているときは毎日の生活に追われ、少し余裕のあるとき、あるいは余程悩み辛いときに感じたことを簡単に記録する以外に、保育園のできごとを振り返ることはしなかった。そのわずかな記録のほとんどを占めるのは、大人(職員)との関係の中で感じたこと、悩んだことについてである。子どもとのかかわりの記録がほとんどないことは、いかに私がこの二年間子どもと向き合っていなかったか、また逆に大人との関係に大半のエネルギーを費やしていたかを示しているように思える。

\*

平成八年五月十五日

日常の園の生活の中で、保育に対するいろいろな考え方が存在することを痛感する。どれもそれぞれ個性的であり、それらが様々な存在してこそ子どもにとってよい保育環境となるのかもしれない。しかしそのためには、保育者が自分の保育観を大切にすると

共に、仲間の保育観を認め、互いに尊重しあうことが必要なように思う。互いの力を十分に発揮するために、意見を十分に交換して、理解する必要がある。保育園の勤務状況では、話し合いを持つ時間をつくるのが難しく、それゆえに誤解が生じたり、理解を得られないことが多くなってしまうように思う。

平成八年五月二十四日

人は他者の目を感じると、少しその人らしさが失われてしまう。特にその人が自分のことを理解してくれているという自信がないときには。保育の場でも自分の保育が他の職員にどう思われているかを気にし過ぎると、自分らしさのない保育をしてしまう。意識の多くを占められるのは今向き合っている子ども心ではなく、見られている自分への評価なのである。自分の価値観だけに頼って行動するのは、けっこうきつい。人の評価が高いことは嬉しいし、それを意識せずにはいられない。

平成八年九月十日

園の生活の中で私が見ついたり感じるのは、たいていそのとき私が他の保母の目を気に



しているときだ。子どもと接するとき、それが生活の中であれ、遊びの中であれ、行事や集会の中であれ、子どもが楽しめるように、子どもが心地よい時間を過ごせるようにと考えていけば全くきついことはないだろう。私が他の保母から良い評価を受けたり、良い関係をつくっていくことは大切なことだが、あまりそこにはかり気持ちがいくと私が窮屈になるし、その窮屈さは子どもに伝わるだろう。子どもに焦点をあわせよう。

平成九年五月二十六日

運動会の練習で思うこと。

自分の余裕のなさを感じる。子どもに対して柔軟でいたいと思いつつ、そうはできない自分がある。子どもに対して威圧的で、選択肢を与えず、こちらの望む活動を強いている。子どもの顔に活気はなく、頑張って我慢をしている。『先生』に認められることを望んで。私はなんでそんなことをするのか。それは他の保母に評価されたいから。子どもをうまく動かし、立派に見栄えのいい運動会を成功させるため。そのために子どもも気持ち、子どもとの関係を後回しにしている。しかし、私はこういう行事に子どもを参加させたくありませんと、自分の考えを主張したり、他の保母のやり方に反論したりしたくない。私なりの子どもへの提供の仕方、子どもにとって楽しく、有意義な活動にする可能性はきつとあるだろう。

\*

私が勤めていた保育園の保母は四交代勤務で、また、開園している朝七時半から夕方六時半は当然常に子どもがいるので、職員が揃ってミーティングをもつことは難しく、たとえ一部の職員とであつても、まとまった話をすることは難しかった。月に一度の職員会議は閉園後、二時間の時間外労働の中で行われ、行事の打ち合わせや最低限の事務連絡をするだけでも時間が足りなかつた。このような状況では互いの考えを理解することはおろか、知ることも難しかった。それゆえ、私だけでなくほとんどの保母が、仲間に自分の保育を理解してもらえない歯がゆさや、不安をもっていたのではないかと思う。特に経験の浅い若い保母にとっては、保育について相談したり、考えを聞いてもらつたりする場がないことは辛いことである。また経験のあるベテラン保母は、それぞれが確固とした保育観をもつ余り、対立するというのがしばしばだった。

保育観、子ども観といった価値観というものは厄介で、それぞれの人が意識しないような深いところで自分の価値観に頼り切つて思うように思う。だから互いがそのことに意識的になつて日常的に価値観を交換しなければ理解し、尊重しあふことは難しい。保育とは子どもと大人、大人と大人、子どもと子どもという常に人間関係の中にあるものであり、



まさに人の価値観と、人の価値観のぶつかりあいの中にあるものである。話し合いをもつ、ときに自分の信念に疑いをもつ、相手の気持ちに思いを馳せる、大人どうしがこのようなことができていなければ、連携体勢で子どもの気持ちを汲み取ることはできない。たとえ話し合いの時間が十分になくても、職員達がこのことに気付いていれば、少しずつ互いを知らせあい、歩み寄る努力がなされたのではないかと思う。

私はこのような状況の中で自分の保育観や思いを表現することはできず、安心して自分らしい保育をすることはできなかった。就職した当初の目的だった子育て支援の実践などとは程遠く、保護者との関係どころか、子どもとの関係も満足にとることはできなかった。常に先輩保育士の評価が気になったので、目に見える形で自分の仕事をアピールすることに必死になっていた。戸惑いながらもだんだんと私にとっての大切なことは、子どもとのかかわりより、見栄えのする行事を企画することや、立派な製作物を子どもにも作らせること、表面的な子どもの成長に対して働きかけをすることになってしまったのである。子どもの思いを大切にしたいと思いつつも、形ある仕事をこなすことで、先輩からの評価を得、そのことで自分の立場を守るようになってしまったのである。

(元神奈川県公立保育園)